

多田謡子

反権力人権基金

News

No.10 2016/06/01

発行・多田謡子反権力人権基金運営委員会

<http://tadayoko.net>

2015年12月19日

第27回受賞発表会を開催しました



夭折した故多田謡子弁護士の遺産をもとに出発した多田謡子反権力人権基金は、2015年12月19日、東京・お茶の水の連合会館で第27回反権力人権賞受賞発表会を開催しました。発表会では選考経過を報告した後、受賞者である、齊間淳子さん（伊方原発反対の闘い）、方清子（ぼんちよんじゃ）さん（日本軍「慰安婦」問題解決のための闘い）、山城博治さん（沖縄における平和運動）の3氏から講演を受け、基金より多田謡子の著作「わたしの敵が見えてきた」と賞金20万円が贈られました。（詳細は2,3面）

発表会とパーティーにはこれまでで最高の130名の方が参加してくださり、社民党副党首の福島みずほさんからメッセージが届くなど、和やかで晴れやかなものとなりました。

本年4月の熊本地震は、伊方原発方向から川内原

発方向にいたる活断層によって引き起こされ、伊方でも川内でも原発を止めることがますます喫緊の課題になっています。そして今、沖縄では、元海兵隊員の米軍属による島袋里奈さん死体遺棄事件に対する深い悲しみと怒りが満ちて、米軍基地の撤去を求める全県的な闘いが起きています。

反権力人権賞を受けてくださった受賞者の方々が、それぞれの持ち場で、平和と人権と自由を守る闘いの最前線で闘い続けていることを思うとき、私たちは本当に身の引き締まる思いで、そうした闘いと連帯し続けたいと思います。

当基金は本年度の反権力人権賞受賞者を募集するとともに、きたる12月17日（土）には、第28回反権力人権賞の受賞発表会を開催します（4面参照）。受賞者の推薦と、受賞発表会への多数の皆さんのご参加を心からお待ちしています。

多田基金は継続のためのカンパを呼びかけています。

第27回受賞発表会

2015年12月19日 連合会館（東京・お茶の水）

齊間淳子氏

（伊方原発反対の闘い）



齊間淳子さんは体調が悪く、どうしても受賞発表会に参加できなくなりましたが、お仲間がビデオレターを作成して送っていただきました。

齊間さんはまず、夫の齊間満さんが1975年に発刊した南海日日新聞のころを話しました。はじめは争いがいやで反対運動に賛同できなかったこと、なぜ反対なのか理由を聞きたいと言うと、満さんがずっと話し続け、もういいと言うまで話し続けたこと。

当時、八幡浜市には別に2つのミニコミがありましたが、それも含めて全新聞は向こう側で、原発の本当のことを知らせねばという思いから、齊間夫妻は家も売り、全財産をだして南海日日新聞を創刊し、原発反対の論陣を張り続けました。そんな中で、1988年、齊間さんは当時存在していた男中心の運動とは別に、「原発から子供を守る女の会」をつくって活動してきました。福島原発事故の後、齊間さんたちは毎月11日の原発ゲート前座り込みを続けています。

「初めは2人か3人からはじめた。それが全国に広まって、いろんな人が毎月11日に訪ねてくるようになった。行ってみたら知らん人が座っていることもある。暑いときも寒い時も、休まず続けているのは、あそこに行ったら反原発の人がおると思われる、闘いの拠点になっていったから。絶やされんなと思って続けている」と齊間さんは述べました。

福島原発事故のとき、齊間さんは「伊方もこんな風になるんやな。帰ってくるふるさとがなくなるんやな」と切実の思いました。「テレビで見てるだけやから本当の思いはわからん。でも、帰るふるさとがなくなるということはわかる」「私らがやってきたのは、伊方原発の地元、原発のそばで原発反対の声を上げてきたこと」「伊方町長が、この辺には原発反対の人はおらんとしたが、私らは反対ですよと…。八幡浜の住民として、私らは反対ですよと、

生きとるあいだは言い続けねばならんと思っている」

最後に、齊間さんは、伊方原発再稼働について市民の意思を明らかにする住民投票を実施するため、11月3日から12月2日まで行い、市民の3分の1にあたる、9939筆を集めた署名運動について述べました。

「数のいかにかわらず、住民の声で決めようということを打ち出すことができたことは良かったと思う」「私自身は、最初あまり賛成でなかったんやけど、やりはじめたら、市民が声を出す、自分の思いを出す場を欲しがっていることがよくわかって、やって良かったと思います。一か月は長かったけれど」

首長の一方的な「承認」宣言を超えて、地元住民の本当の声を明らかにして闘い続けようとする齊間さんのビデオレターに大きな拍手が沸きました。

ばんちよんじゃ

方清子氏

（日本軍「慰安婦」問題解決のための闘い）



えんじ色の美しいチマチョゴリ姿で登壇した方清子さんは、権力による抑圧や歴史の歪曲が横行し、慰安婦問題を解決する闘いが、反権力の闘いの先頭に立たざるを得なくなっているからこそ、「反権力人権賞と言う素敵な名前の賞をいただいたことに心から感謝します」と述べて、会場から大きな拍手が沸きました。

関西の状況につて、方さんは2013年5月、「銃弾の飛び交う戦場において、慰安所や慰安婦は必要であった」と発言した橋下大阪市長が、通算8年でやっと首長を降りたこと、しかし、満面の笑みで「引退」会見を開いた橋下氏と維新への大阪の人々の支持には「失望している」と率直に述べました。方さんが共同代表を務める日本軍「慰安婦」問題・関西ネットワーク（関西ネット）は発言の前年から「強制連行の証拠はない。証拠があるなら韓国側が出せ」「河野談話は最悪」などと発言していた橋下市長への抗議行動を積み重ねていました。被害者ハルモニが「私が証拠だ。証拠を出せと言うなら私と会

え」と来日したにもかかわらず、一切会おうとしなかった橋下市長は、発言が批判を浴び、1か月間に1万件の抗議が大阪市に寄せられると、一転して「私は会いますよ」と言い出しました。面談をパフォーマンスとして利用し、自分の名誉挽回をはかる意図がありありとしている中で、当事者と方さんたちは面談を拒否しましたが、その後、それを口実に、インターネット上で排外主義的な誹謗、攻撃が1年半たっても続いています。ヘイトスピーチと同じことを知事や市長という公人の立場で行い続ける橋下氏を許すことはできないと方さんは述べました。

1991年、金学順さんが名乗り出て以降、闘われてきた慰安婦問題を解決する闘いによって、1993年、日本政府は河野談話によって日本軍が関与したこと、意に反した強制性があったことを認めました。しかし、日韓条約によって請求権は消滅したという立場に固執する日本政府は、責任を認めず、賠償もせず、国民基金による「人道的支援」に固執したため、被害者は受け取りを拒否、被害者の尊厳は回復されないまま今日にいたっています。

戦後70年の安倍首相談話に慰安婦という言葉は一言も出てきませんでした。当事者の責任と向き合う言葉は皆無で、他人事のように「寄り添いたい」と言われても、被害者はただ「寄り添っていらん」と言うのみです。そして、「子や孫にまで謝罪を続ける宿命を負わせてはいけない」という言葉。被害者の言葉を待たず、加害者が「謝罪はこれで終わり」と宣言する傲慢。「一刻も早く、一日も早く、被害者の尊厳を取り戻さねばならない。置き去りにされた被害者たちが亡くなられる前に、なんとしても被害者の尊厳を回復し、被害者が納得する解決のために頑張っていきたい。それは戦争に反対し、平和な社会をめざす闘いでもあるのだ」という締めくくりの言葉に、再び大きな共感の拍手が贈られました。

山城博治氏

(沖縄における平和運動)



沖縄県平和運動センター事務局長として、辺野古新基地反対闘争の先頭に立ってきた山城博治さんは、2015年4月、悪性リンパ腫と診断されて戦列を離れましたが、8月末に退院し11月からはゲート前の行動に復帰して闘い続けています。

登壇した山城さんはまず、「東京からもたくさん

心配する声が届くのですが、この通り元気になったことを報告します」と、張りのある声で発言して大きな拍手を受けました。

高校生で運動に参加して以来、沖縄の独自性、異質性を踏まえた自立という立場に立ってきた、自立してこそ普遍的な連帯を求められることができると述べた山城さんは、10年の苦しい闘いを経て、幅広い勢力がオール沖縄として自立して翁長知事を誕生させた経過を報告しました。そして翁長知事が魂を込めて語る庶民の悩み、悲しみ、そして希望の言葉には全身の毛が総立ちになるようだ、オール沖縄として日本政府、アメリカ政府と対峙するまでになった今、辺野古の闘いの未来は明るいと述べました。

「今、戦争がやってこようとしている。それを迎撃側は情念がなければ勝つことはできない」

そう言った山城さんは沖縄戦の一こまを紹介しました。読谷村にアメリカ軍が上陸したとき、日本軍は16～18歳の若者に爆弾を抱えさせて戦車に突撃させ100～200名が死んだ。川は血の川となって海にそそいだ。そんな戦争はやっちゃならん、やれない。しかし、これを自衛隊の戦史は「輝かしい武勲」と記している。また同じようなことが繰り返されようとしている。絶対的な非戦、反戦の立場を貫かねばならないと山城さんは述べました。

辺野古現地では団塊の世代の人々が闘いの中心となっていることに触れて、山城さんは、「初めのころは、若い人たちが少ないことをずっと心配していた。しかし、闘いのなかで考えを変えた。団塊の世代こそは戦後民主主義の申し子なのではないか。親からは戦争の悲惨さを教えられ、学校では憲法の平和主義を学んだこの世代こそが平和の最大の砦であり、私たちの世代こそが危険な道を止めることができる。後はないと思わねばならない」と述べました。

オール沖縄会議は事務局長を自治労沖縄の委員長が担っています。その働きかけを通じて辺野古現地の闘いには自治労九州からも参加するまでになりました。少しずつですが労働者が動き出すまでになりました。この動きを全国に広げること、自治労だけでなく他の産別にも広げ、労働者が部隊として登場することが求められています。

「明るく闘い、1000人が座り込めば工事は止まります。力を貸してください」

確信に満ちた山城さんの訴えに、会場は連帯して闘い、必ず勝利するという意思を込めた大きな拍手でこたえました。

第28回多田謡子反権力人権賞 候補者推薦のお願い

2016年6月
多田謡子反権力人権基金運営委員会

本年度も、下記要領で多田謡子反権力人権賞の候補者の推薦を受け付けます。自薦、他薦は問いません。多数のご推薦をお待ちしています。(これまでの受賞者は当基金のホームページで閲覧できます。)

・賞の内容

多田謡子の著作「私の敵が見えてきた」および金20万円の贈呈

・選考基準

国家権力をはじめとしたあらゆる権力に対して闘い、自由と人権を擁護するために活動している個人または団体

・推薦方法

候補者名と活動分野の簡単な紹介を付して、文書で下記住所に郵送、FAXまたはe-mailで送信してください。

・推薦締切

2016年9月30日

・推薦受付先

〒105-0004

東京都港区新橋2-8-16

石田ビル5F 救援連絡センター気付

多田謡子反権力人権基金運営委員会

TEL 03-3591-1301

FAX 03-3591-3583

e-mail web@tadayoko.net

お問い合わせにはできるだけe-mailをご利用ください。

なお、受賞者には受賞発表会での講演をお願いいたします。

12月17日(土)に受賞発表会 を開催します。

2016年度の受賞発表会は下記日程で行います。今年もたくさんの皆様のご参加をお待ちしています。(受賞者決定後、詳細をお知らせします。)

【第28回多田謡子反権力人権賞受賞発表会】

● 日程 12月17日(土) 午後2時～5時

● 場所 連合会館201号室

東京・御茶ノ水駅から徒歩5分

● 発表会后、同所で記念パーティーを行います。

● 発表会、パーティーとも参加費無料

Special Thanks !!

昨年の発表会の模様が インターネット配信されています。

昨年(2015年度)の受賞発表会の動画が当日参加して下さった方によって、インターネット上のツイキャスというシステムで配信されています。大変ありがとうございます。

<http://twitcasting.tv/chikapin1/movie/225421892>
「ツイキャス 反権力人権賞」で検索可能です。

基金継続のための寄付のお願い

基金では趣旨に賛同される皆さんからのご寄付を呼びかけています。ご送金は下記口座まで。ご寄付と明記の上、お名前とご住所を付して送金して下さい。

【郵便振替口座】

口座番号 00110-2-356484

口座名称 多田謡子反権力人権基金